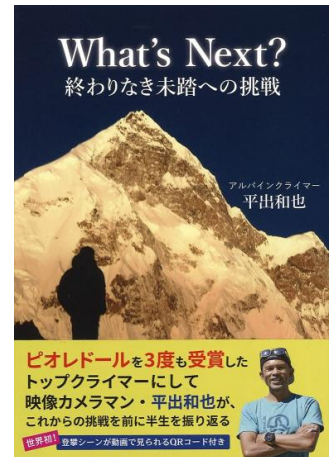


📖 「What's Next? 終わりのなき未踏への挑戦」(平出和也著)

鎮魂・K2 に破れし世界最強コンビ平出和也&中島健郎、そして谷口けい。
平出和也：1979（昭和 54）年生れ。長野県出身。未踏峰・未踏ルートに拘り 2008 年、インド-カメット（7756m）南東壁から谷口けいと初登頂し、ピオレドール賞を日本人初受賞。17 年パキスタン・シスパーレ（7611m）北東壁登頂で 2 回目、19 年パキスタン・ラカボシ（7788m）南面壁登頂で 3 回目、23 年パキスタン・ティリチミール（7708m）北壁登頂で 4 回目のピオレドール賞受賞し、パートナーの中島健郎と共に世界最強コンビとして高い評価を得る。



2024 年 7 月突然飛び込んできた平出和也・中島健郎両氏の K2 西壁遭難ニュースに震撼した山岳関係者は多かったに違いない。7 月 27 日午前 7 時頃、両氏が標高 7550m 地点より氷と共に滑落する様子が標高 5700m の ABC で見守っていた撮影スタッフにより確認され、ヘリにより探索された結果、二人は標高 6300m 地点にて発見されたもののロープで繋がっているが動かず、着陸できるような地形では無く生死の確認出来ないまま救助活動を断念せざるを得なかったという。

1950 年 6 月のフランス隊によるアンナプルナ（8091m）初登頂から始まったヒマラヤの高峰 14 座を巡る国家あげての競争は 53 年 5 月英国隊エベレスト（8848m）、56 年 5 月日本隊マナスル（8163m）等を経て 64 年 5 月中国隊によるシシャパンマ（8027m）にて終止符を打ち、その後はより困難なルートを求めて若者達は未踏の氷壁に取りつくようになり、平成時代に入りその先頭に立っていたのがこの 2 人であった。その活躍ぶりがテレビに流れるようになり私は気がつけば録画し、気の向くままに引っ張り出して見入り、まさに「What's Next?」と問いかけていた折も折の事故だった。

氏は登山家であり山岳写真家でもあり、三浦雄一郎氏の「世界最高齢 80 歳でエベレスト」に密着し映像記録、あるいは 8 千㍎峰 14 座挑戦中の竹内洋岳氏のガッシャブルム（8035m）とブロード・ピーク（8047m）に映像記録担当パートナーとして同行、「日本 3 百名山一筆書き」達成の田中陽希氏の一部の山行（厳冬期で厳しい山）でもその力量を遺憾なく発揮しアスリートカメラマンとして無くてはならない存在でもあった。

氏は高校では陸上部に属し競歩で全国 6 位となり、進学した東海大学でも競歩を続け 2 年次には日本選手権で 10 位に入るほどの実力者だったが、競技者としての先行きに夢を描く事が出来なくなり、トレーニングに登っていた山に次第にのめり込むようになり 99 年秋陸上部を退部し山岳部に転部したという。並外れたあの体力、強さは学生時代に培われたアスリートとして全国レベルの実力者であったればこそだったわけだ。

植村直己、長谷川恒男、谷口けい、河野兵一、星野道夫等著名な登山家や冒険家が 43 歳で亡くなっているところから密かにささやかれている「43 歳の壁」をパキスタン・カールン・コー（6977m）北西壁登頂で無事クリアした氏は本書の中で「今こうして生きている事をしみじみと感謝する。ティリチミール北壁や、K2 の未踏ルートに向けて、もう少し悪あがきをしてみよう」と次なる挑戦に向け決意を新たにしている。

「43 歳の壁」について冒険家角幡唯介氏は「43 歳は経験の豊かさ肉体の衰えが交差する時であり、経験の拡大に肉体が追いつかなる年頃」という。誰もが頷ける現実であり、そろそろ引退を考えたら如何かとも思うのだが、本人はまだまだやれる、世間が噂する「43 歳の落とし穴」も無事クリアしたし、誰も試みた事のないティリチミール北壁や K2 西壁という、より困難な未踏壁へ挑戦するなら今だとなったに違

いない。植村直己氏は一つの挑戦が終わり、帰国すると会う人の多くが、期待を込め好奇心丸出しで「お疲れ様でした。次は何処へ行くのですか？」と問いかけてくると云い、それが鬱陶しかったようで、応援してくれるスポンサーの意向もあり、心理的にも大きなプレッシャーになったと聞いているので43歳を越えて、焦りがあったのか。

2024年12月、朝日新聞に平出、中島両氏を追悼する記事が掲載されたが、1回目のピオレドール賞受賞の際、取材した記者は、特に女性では世界初という事で注目を集めた谷口氏を記事の軸にし、それを読んだ平出氏から「僕は付けたしか」と痛烈な言葉を浴びたと反省していた。インド・カメット峰（7756m）の高さ1800mに及ぶ未踏の南東壁、終始リードし4日で登りきる予定の所7日もかかり、食料も尽きふらふらになり帰還した平出には「オレが引っ張り上げたのに」との思いがあったかもしれないし、それ以上に二人で成し遂げたのだとのとの気持ちが強かったに違いなく、せめて同等に扱って欲しかったのだろう。二人はその後パートナーとしてヒマラヤの難ルートに挑み続け、一時は同居もしていたようで下世話では結婚したのでは囁かれていたようだが、その辺の事は本書では明らかにされてない。2015年12月大雪山系黒岳頂上付近の岩場から墜落した谷口ケイ氏は1972年生れで平出氏より7歳年上、パートナーとして9年間数々の難壁に挑んできた仲であり、行方不明との第一報を受けた時「けいさんともあろう者が、あんなところで死ぬはずない」と到底信じる事が出来なかったと記す。いかに残念だったかは想像に余りある。

谷口とのコンビ解消後、新しくパートナーとなった中島健郎氏との最初の出会いは2014年秋、ミャンマー最高峰カカボラジ（5881m）を目指すNHKスペシャル番組「幻の山カカボラジ アジア最後の秘境に行く」に映像カメラマンとして参加した時のこと。この時の隊長は我が会の重鎮Nさんの山の師匠倉岡裕之氏（当時53歳）で、平出は2ヶ月間ずっと一緒にいた感想として「健郎（当時30歳）は若くて体力があり登山センスもありそうだったが、多少のリスクはお構いなし、無鉄砲で、自信家で、自分がトップでリードしないと気がすまないという雰囲気があり、危なっかしい感じがして心配だった」と記す。NHK BSで放送された地球トラベラー・グレートヒマラヤシリーズのカンチェンジュンガやダウガギリで紹介される健郎さんはその風貌や語り口からみて、いつも穏やかな表情浮かべ、いかにも人柄良さそうで、人と争ったり、欲得には無縁な感じに見えていたので、平出氏の言葉は意外だった。今回、改めて録画した「幻の山カカボラジ」を見直してみたが、当時29歳の中島は若々しく謙虚で平出の云うような雰囲気を感じる事は出来なかった。最終アタックにむかう折に「ヨシ、登るぞ」と決意を込めたおりに唯一秘めたる闘志を感じたのみだが、余人は知らず平出という優者のみが知る勘が働いての事かと思う。

遭難から約3ヶ月後平出氏に日本人最多4度目の、中島氏に3度目のピオレドール賞受賞が決まった。23年7月パキスタン・ヒンズークシュ最高峰・ティリチミールの未踏北壁登頂を祝したもので、世界の登山界が二人に贈った惜しみない賞賛と新聞が伝えている。

平成が生んだ稀有のクライマー平出和也、数多くの山行を共にし、喜びも悲しみも分かち合った谷口けいと中島健郎、3人共山で亡くなってしまった。名を成した登山家は沢山いるが、山野井泰史・妙子夫妻を除き年下の人達にはあまり関心持ってなかったが、平出・谷口コンビのピオレドール受賞から2人に関心を持つようになり、その後中島健郎氏に加わって3人に注目してただけに、この3人が亡くなったのは誠に残念。

世界最強コンビが訓練を重ね、最大限の努力と技術の限りをつくし全力で挑んでも跳ね返されてしまった非情の山K2西壁、いつの日かオレがと狙っている若者はいるに違いない。これ以上もう死者は見たくない、このままそっとしておきなよ！と年寄りと思う。（AKA）

山と溪谷社 2023年2月刊 1980円

『参考図書』

「太陽のかけら 谷口けいの軌跡」大石明弘著 山と溪谷社 2023年1月 1100円